

## 地域の学習支援教室における中高生への日本語学習支援 —外国につながる高校生へのインタビューから—

唐木澤みどり (学習院大学)

### 1. 研究の背景と目的

子どもの日本語教育は、ライフステージに応じた支援を考える必要がある(斎藤 2009)。それゆえ、長期的に子どもと関わる事が可能な地域でのサポートが重要となるが、地域における日本語学習支援の検討は十分とは言えず、日本語でのコミュニケーションに支障がある子どもの支援に戸惑うケースも少なくない。したがって、地域の学習支援教室においてどのような日本語学習支援が可能かを検討することは課題であり、特に将来を考える時期である中高生への支援を検討する研究には意義があると考えられる。「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査結果」(文部科学省 2022)から、中学生の進学や高校生の中退、進路等に課題があり、支援が必要なことが明らかとなっている。地域の学習支援教室における外国につながる中学生への支援は、教科学習支援、入試対策が中心となるケースが多いが、「言語文化的な差異を乗り越え、他者と関わっていく力」の育成の必要性も指摘されている(佐藤 2009)。また、高校生への支援は、キャリア支援等ライフステージに応じた支援や、教育委員会や高校との連携等の事例も報告されている(海老原 2021、高橋 2020 他)が、義務教育である小中学生と比較すると支援が未だ不十分である。中高生にとって、教科学習や入試を目標とするだけではない、地域の学習支援教室だからこそできる支援とは何かを考えていくことが求められる。

本発表では、中学時代を日本の学校及び地域の学習支援教室で学んできた外国につながる高校生へのインタビューを通して、地域の学習支援教室における中高生のための日本語学習支援について検討することを目的とする。

### 2. 研究方法

発表者がボランティアとして活動する地域の学習支援教室(E教室と呼ぶ)には外国につながる子どもが多く通っている。E教室に中学時代に通っていた高校生2名(AとB:ネパール出身)に半構造化インタビューを行った。2人に協力を依頼した理由は、来日後に日本語を初めて学び、主に日本で中学、高校生活を送り、地域の学習支援教室でも学んだ経験があることから、日本語学習や日本の学校、学習支援教室での学びのプロセスを聞くことができると考えたからである。インタビューは1回1時間で、2人と発表者の3人で話す形式で行った。2人は母語が同じであり、記憶の想起や母語による語りの助け合いも可能だと考えた。インタビューの目的として、学習支援教室において外国につながる子どもたちにどのような支援が必要かを知りたいことを伝え、「学校や学習支援教室でどのように日本語や教科を学んできたか」「学習支援教室に通ってよかったことは何か」「日本語が上手になるためにどうすればよいと思うか」をテーマに自由に話してもらった。さらに発表者の支援実践記録、学習支援教室の代表者へのインタビューを補足データとした。インタビューデータは「日本語」及び「学習」との関わりからコーディングし、2人のデータを比較検討しながらカテゴリーを生成した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 分析の結果

2人の高校生は「日本語以外の言語」も使いながら、学校や家庭以外でも「多様な人と出会い」、「日本語を一生懸命聞くこと・話すこと」を繰り返す中で、「自分に合ったレベル」を求め、「伝えよう・理解しようという気持ち」を持つ相手と対話し、「学習に必要な日本語の力」や「学ぶ力」を徐々に育てていったと考えられる。AはE教室での関わりから将来にもつながる興味・関心が芽生え、E教室外でボランティア活動を始めた。Bは高校と中学の違いを明確に意識し、自分なりに日本語で学ぶための姿勢や方法を見出し、E教室で出身が同じ後輩にアドバイスをすることに喜びを感じていた。一方で、日本語能力に関する自己評価のゆれや他者評価とのずれから、高校生になっても日本語に関わる承認欲求が満たされない現状も明らかとなった。

#### 3.2. 考察

分析結果における「出会い」と「対話」の重要性から、佐藤（1995）の学びの定義を参照し、中高生が他者や学ぶ対象、そして自己と出会い、対話することを通して学ぶための日本語学習支援について考察を行った。まず、学習支援教室においては、学ぶ主体である子どもの学びに関わる他者として寄り添い、伝え合える関係を築いていくことが重要である。ロールモデルともなりうる支援者とのやりとりの中で「日本語を一生懸命聞くこと・話すこと」を繰り返すことが日本語学習につながると考えられる。さらに、社会の一員として役に立つ、他者に認められるということは、日本で生活する外国につながる子どもたちにとって得ることが難しい体験であるが、青年期の発達のプロセスとしても重要な点である。教室に通う年齢の異なる子ども同士の関係づくりや、複数言語話者としての経験を生かし、社会の中で役立つ存在であると感じられる活動を取り入れていくことにより、自身の日本語能力の向上への意欲や自信につながり、より幅広い出会いと対話が可能となるのではないか。それは、「他者と関わっていく力」（佐藤 2009）の育成にもつながるものと考えられる。また、将来を見据えた他者との出会いのためには教室内に留まらず、教室外の支援のネットワーク作りとその活用が重要であることが示唆される。

#### 【引用文献】

海老原周子（2021）「未来の担い手を育てる—外国ルーツの若者が『日本で育って良かった』

と思える社会へ—」『都市とガバナンス』35:68-72、公益財団法人日本都市センター

齋藤ひろみ(2009)「子どもたちのライフコースと学習支援—主体的な学びを形成するために

—」齋藤ひろみ・佐藤郡衛（編）『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて—』ひつじ書房、pp.251-265

佐藤郡衛（2009）「学習支援から教育コミュニティの創造へ」齋藤ひろみ・佐藤郡衛（編）

『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて—』ひつじ書房、pp.267-282

佐藤学（1995）「学びの対話的实践へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い』東京大学出版会、pp.49-91

高橋清樹（2020）「NPOの支援現場からみる外国にルーツを持つ若者」『外国にルーツを持つ若者の大学進学に対する支援—高校、地域社会、大学の連携に向けて—』東洋大学人間科学総合研究所公開シンポジウム記録集、pp.31-38

文部科学省（2022）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要」